

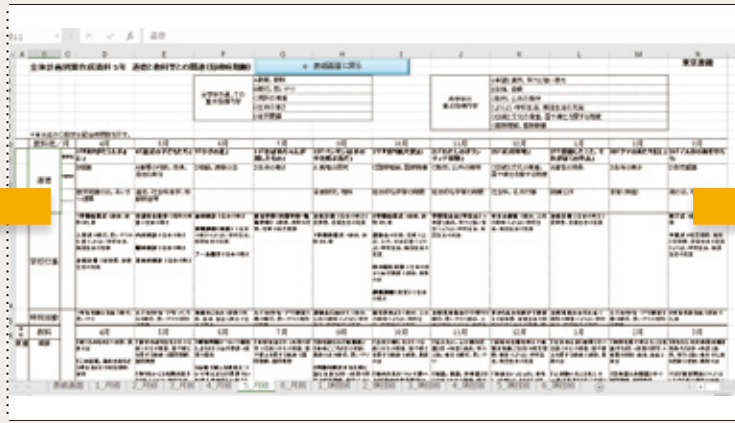
道徳科の授業を要とした、
教育活動全体で進める道徳教育

道徳科は「特別の教科 道徳」と言われますが、その位置づけは学習指導要領を見ると明確です。学習指導要領総則には「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと。」と述べられています。

このことからわかるように、道徳教育は全教育活動を通して、すなわち教育課程内にある各教科や総合、外国語活動、更には特別活動等全てにおいて、行われることになります。一方で、年間35時間ある道徳科の授業は、道徳教育の要としての位置づけです。

道徳教育を教育活動全体で進めるための手段が、以下の
ような工夫を組み込むことです。

中学校



別葉を学校ごとに作成、更新をする機会がありますか？ 行事や各教科など教育活動全体を一覧できる別葉は、道徳教育全体を俯瞰して見ることができず、

東京書籍「新訂 新しい道徳」と教科等における道徳の項目との関連を示した「全体計画別葉作成資料 道徳と教科等との関連（指導時期順/内容項目別）」は、左右にあるQRコードからアクセスできます。（Excelを使用できる環境でご活用ください。）



第 号 合和 年 月 日

○○○立　○○○小学校
2年　○組　担任名

◎「今日の道徳授業」の紹介

教材名 30 金の おの

ねらい： うそやごまかしをしないで、素直に伸び伸びと生活しようとする判断力を育てます。

■教材の内容について
前段は、拙稿が示した

両者を比較して、誠実なきこりの謙虚さを読み取れるようになります。

■子供の真実について

うとするためのうそ。積極的に自分を有利にしようとするうそ、深く考えないでその場の雰囲気につられてしまったうそなどがあります。いずれも良心に欺ずべきことであることをこの時期にはっきりとらえられるようにする必要があります。

学級通信で道徳の授業を紹介してみてはいかがでしょうか。授業を通して変化していく子どもたちの考えから、大人が気づかされることは多いと思います。

東京書籍「新訂 新しい道徳」の教師用指導書の中には、「道徳通信」のデータなど、道徳教育でご利用いただけるツールが含まれています。



高齢者の方の体調をみたり、身の回りの世話をしたりする人たち。

くらしの安全を守るため、
24時間体制で消防車や救急車などに、
出動指令を出す人々。

教科書に掲載されている「つながる・広がる」は他教科や特別活動、人権週間などの学校行事を始め、様々な教育活動につながったり、広がったりするページです。道徳科の授業だけでなく、そこを起点に教育活動全体で進める道徳教育へつなげていく、広げていくような使い方が可能です。（東京書籍「新訂 新しい道徳6」p.174）

vol.
02
2023

考 え 議 論 す

道徳への
第一歩

INDEX

- 「自己を見つめ、
心豊かに学び合う児童の育成を目指して」
～2年生「金のおの」から、正直に生きる良さに気づく～
玉村町立玉村小学校 石川 侑哉 先生 2・3
- 道徳科の授業を要とした、
教育活動全体で進める道徳教育 4



「自己を見つめ、心豊かに学び合う 児童の育成を目指して」

2年生「金のおの」から、
正直に生きる良さに気づく

群馬県玉村町立玉村小学校

校長：高橋幸伸 先生 授業者：石川侑哉 先生



多様な考えを交流させる道徳の 授業づくりに向けて

玉村町立玉村小学校（高橋幸伸校長・児童数 370 名）は、創立 149 年目（令和 5 年 1 月）を迎えた伝統校だ。本年度、玉村小学校では『「自己を見つめ、心豊かに学び合う児童の育成」～多様な考えを交流させる道徳の授業づくりを通して～』を研究主題として設定し、学校全体で研究を進めている。教職員の働き方が話題となる昨今、限りある時間の中で「まずは挑戦してみましょう」という高橋校長の発信のもと、教師が互いに授業を公開し合い、出てきた課題を次の人の授業で活かせるよう、バトンを渡しながら研究を進めてきた。研究を通して出てきたキーワードをもとに、学校がチームとして授業力をアップデートしていく仕組みは、まさに学校組織の一つの理想の形だ。

2 年 2 組では「金のおの（イソップ物語）」を教材に、正直でいる良さとは何か（A 主として自分自身に関すること [正直、誠実]）について、考えた。

導入では、嘘をつくとうなるか子どもたちに考えさせたあとに、事前のアンケート結果を大型モニターで紹介。そこ



「正直でいると良いことがあるの?」と、石川先生に聞かれて、話し合う子どもたち。徐々にねらいに迫っていった。

でクラスのほとんどの子が嘘をついた経験があると判明した。「嘘をついた経験はあるけれど、正直でもありたい」という子どもたちのギャップをもとに、本時のめあて「正直でいるとどんな良いことがあるだろうか」は子どもたちと一緒につくられた。「金のおの」で登場する二人の木こりについて、どのような違いがあるか、場面絵を黒板に貼りながらテンポ良く登場人物の整理が進む。教材の内容理解を短く済ませ、自分ごとに置き換えて考える時間を少しでも多く取りたいからと、石川教諭は話す。「なぜ最初の木こりは本当のことを正直に言えたのかな」と石川教諭が問いかけると「自分の斧が大切だから」「斧がなくなったら困るから」と素直に答える子どもたち。



ネームプレートを黒板に貼って、 自分の立場を明確に

二人の木こりを対比させながら「誰かに似ていない?」と示唆する石川教諭。導入で使用したアンケート結果は大型モニターに映したままだ。「自分だったら神様に本当のことを言えますか?」と子どもたちにたずね、自分の今の考えを黒板上のメーターで表現させていく。そして子どもたちは自由移動をしながらお互いの考えを伝え合っていく。「今日の宿題はないってお母さんに言っちゃってね…」と自分の経験について話す子どもたちもちらほら。当初石川教諭は、教材の内容に沿って自分なら神様にどう答えるか意見交換をさせる予定であったが、子どもたちのつぶやきの中に、自分の経験を織り交ぜながら理由を説明する姿が見え始めていた。他の授業でも、自由に発言できる雰囲気をつくるように心がけていると話す石川教諭。普段子どもたちにプレーキをかけさせず、本音が出やすい環境を整えているからこそ、物事を自分ごとに置き換えて考える訓練が自然となされているのだろう。「確かに!」「〇〇ちゃんの気持ち、わか

る!」と飛び交う相槌。オープンに話をしてくれた子どもたちの経験が共感を生み、深まりに繋がっていった。

友達の考えを聞いて、自分の考えが変化した子どもたちは、黒板のプレート貼り直し始めた。「正直」のほうにプレート移す子どもたちの多くは、怒られるから正直でいたほうが良いと話す。そこには「ペットのご飯を黙って増やしちゃったことがあって…」などと、自分ごととして考え始めている様子が見えた。

怒られるのが嫌だから正直でいたいと考える子どもたちに、石川教諭は「嘘をついても怒られなければいいかな」と子どもたちの気持ちをさらに揺さぶる。そうすると「嘘をつくともやもやする」と一人の子のつぶやきをきっかけに、「正直でいた方が心が気持ち良い」「スッキリする」「後悔しない」などのキーワードが子どもたちから返ってきた。なぜもやもやするのか、自分の心に深く問いかける様子が印象的だ。



ものをもらえるから、 正直でいたほうが良いの?

「金のおの」では正直な木こりが金銀の斧を神様から受け取る教材だ。自分だったら神様に本当のことを言えるか、



「自分だったら神様に本当のことを言えますか?」この後、子どもたちの考えは、話し合いを通して変化していった。



板書を構造的にすることで、教材内容を自分ごとへリンクさせやすくなり、多様な考えを見やすくしたりすることができる。なお、ネームプレートの散らばり方を見ると、子どもたちが友達の考えを聞いて自分のプレートを動かした様子が見える。

自分の経験を混じえながら考えてきた子どもたちは、何かがもらえるからで判断するのではなく、「正直でいるほうが後悔しない」と自分の気持ちを大切にしながら、正直でいることの良さについて考えていた。また「何かあったときに助けてもらえるから」と、他者との関わりの中においても、正直でいることの良さについても気づき始めていた。

正直でいたいけれど、嘘をついてしまったことがある。当初のスタート地点を見失わないように、大型モニターには変わらずアンケート結果が表示されたままだ。正直でいたほうが、自分が気持ちよく生活ができるねと石川教諭はまとめ、子どもたちは振り返りを記入、発表して授業は終了した。

本年度 1 年生でも「正直、誠実」に関する授業が行われ、「怒られるから嘘をついてはいけない」から「嘘をつくともやもやする」ことに気づかせるまで時間がかかったようだ。その点、今回の 2 年生はもやもやする自分の気持ちに気づき、「なぜもやもやするのか」と自己を見つめることをきっかけに、経験や他者とのつながりを織り交ぜながら、「正直でいたほうがスッキリする」と考え始め、ねらいに迫っていった。発達段階や学級の状況に応じて教材や発問を考え抜くことが大切だと石川教諭は話す。その背景には組織として一人ひとりの教員を支える学校の力が垣間見えた。

石川教諭は子どもたちに対して、「道徳の授業を通して、相手を尊重し、多様性を認められる人間になって欲しいし、自分の考えを素直に伝えられる人間になって欲しい。様々な考えを広く受け入れられることで、より良い生き方のできる人間になって欲しい。」と話す。学校組織が教員一人ひとりを支え、学級担任が子どもたち一人ひとりを支え、子どもたちは学級担任に多様な考えを還元し、教員一人ひとりは学校組織に様々な知見を還元する。そうしたサイクルはチーム玉村小学校を、今後より強固な組織へと発展させるだろう。